

パプリカの早熟栽培における栽植密度と主枝仕立て方法					
[要約] パプリカ「フィエスタ」の早熟栽培において、 <u>主枝1本仕立て2条植えでは主枝本数833本/aが、主枝V字2本仕立てでは主枝本数1,111本/aが収量および品質に優れ、商品果収量は1.5t～1.6t/aとなる。</u>					
担当部署	野菜栽培部・野菜栽培チーム			連絡先	092-922-4364
対象作目	野菜	専門項目	栽培	成果分類	技術改良

[背景・ねらい]

食の多様化に伴いパプリカの需要が増加しているが、国内消費量の約9割が輸入であり、消費者からは生産現場の見える新鮮で安全な国内での生産が望まれている。パプリカは主にオランダにおいて養液栽培で栽培されている品目であるため、土耕栽培による栽培技術は確立していない。このため、土耕栽培では生産面で不安定であり、国内では生産が伸び悩んでいる。

そこで、平坦地水田において雨よけハウスを利用したパプリカの早熟栽培技術を確立するために、収量、品質が優れる栽植密度と主枝仕立て方法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 「フィエスタ」、「オロベル」とともに主枝1本仕立て、主枝本数833本/aで収量が最も多くなり、「フィエスタ」では商品果収量は約1.6t/aで、品質も良好である(図1、図2)。
2. 「フィエスタ」の主枝V字2本仕立てにおいて、主枝本数が556～1,111本/aでは、主枝本数が多いほど主枝当たりの着果数は減少するが、商品果収量は多くなる。A品率はほぼ同等である(図1、表1)。
3. 主枝本数833本/aでは、主枝1本仕立てが主枝V字2本仕立てより果実の2L果の割合が多く、1果重も重い(表1)。
4. 収穫前期における収穫のピークは、主枝1本仕立てでは6月中旬と7月中旬で、主枝V字2本仕立てでは6月下旬から7月中旬であり、主枝1本仕立てでは6月の収量が多い(図1、図3)。

[成果の活用面・留意点]

1. 主枝1本仕立てとV字2本仕立てを組み合わせる栽培することにより、収穫前期において収穫時期の分散化が図られる。
2. 定植後は4月下旬頃まで2重被覆やトンネル等により保温し、初期の生育促進を図る。
3. 夏季はハウス内の昇温を抑制するため、フルオープンハウスを利用したり、遮熱効果の高いクールホワイト(遮光率45%)等の資材で遮光する。

[具体的データ]

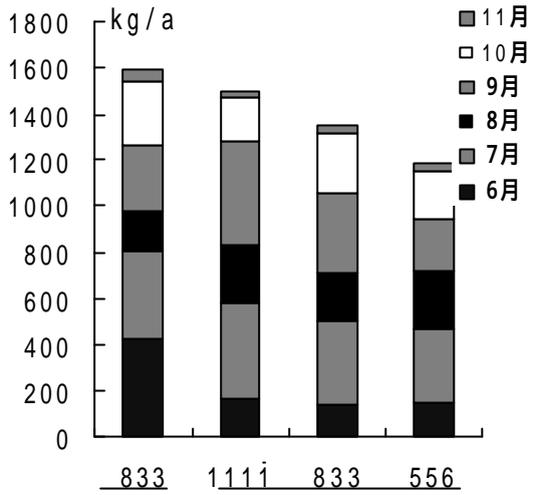


図1 栽植密度および仕立て方法と商品果収量 (品種:フィエスタ H14年)

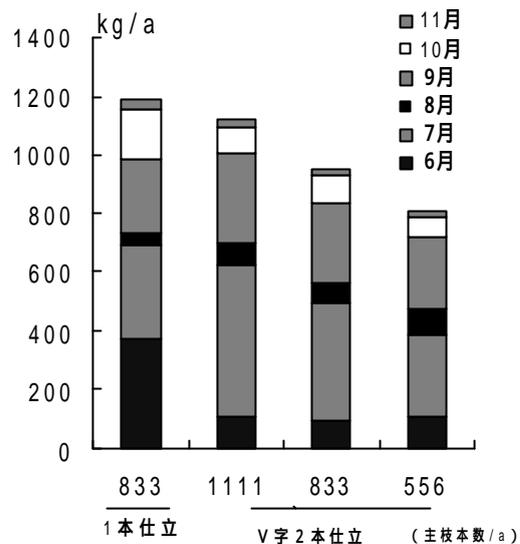


図2 栽植密度および仕立て法と商品果収量 (品種:オロベル H14年)

- 注) 1. 畝間は全て120cm、1本仕立ては2条で条間30cm
 2. 播種:1月25日、定植:3月に26日
 3. 施設:フルオープンビニールハウスを用い、夏期30 以上で天井を開放。定植後から4月25日まで有孔フィルムによるトンネル被覆、7月から10月上旬までクールホワイト(遮光率45%)で遮光
 4. 樹勢調節のため1本仕立ては第1開花節から、V字2本仕立ては第3開花節から着果

表1 果実品質と着果数

主枝の仕立て方法	主枝本数	商品A品率	商品果率	1果重	着果数	果実の階級別割合			
						S	M	L	2L
1本仕立	833	68	90	136	15.4	4	45	36	15
V字2本仕立	1111	72	89	128	11.8	1	61	34	4
V字2本仕立	833	72	91	129	13.8	3	58	34	5
V字2本仕立	556	64	88	130	18.8	1	56	39	4

注)果実の階級30g S < 70g、70g M < 130g、130g L < 200g、200g 2L

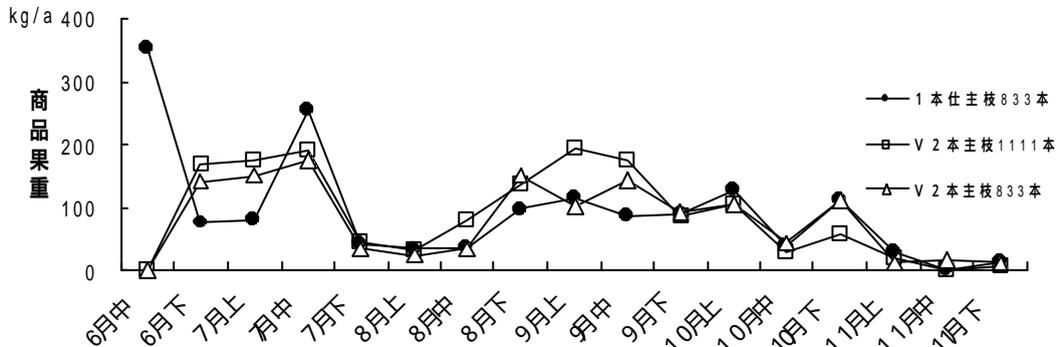


図3 時期別商品果収量の推移 (品種:フィエスタ H14年)

[その他]

研究課題名:パブリカの省力的管理技術の確立
 予算区分:国庫助成(新技術地域実用化)
 研究期間:平成14年度(平成13~15年)
 研究担当者:井上恵子、柴戸靖志、古賀 武